

主な意見等の整理（第6回）

（ICTを活用した幼児教育）

- ICTは、幼児の体験との関連の中で必要に応じて活用することが重要。保育者においては、ICTによる間接体験だけで終わらず、直接体験と結び付けるためにどうするかが重要。
- ICTの活用は、自分の発見を他者と共有（自分の体験と友達の体験をつなぐ）、省察と展望（自分のこれまでの体験とこれからの体験をつなぐ）、無限の情報へのアクセス（自分の体験を広げる）といった体験と体験をつなぐ道具になる。また、デジタル機器や技術が制作遊びに革新を生み、新たな試行錯誤や気付きにつながる創造性の育成など、ICTの活用には可能性がある。
- 子供たちは、例えば、自分たちの遊びの記録や振り返りの道具の一つとしてタブレットを使っている。
- ICTの活用の周知をする際には、合わせて、乳幼児期は、身体性、すなわち諸感覚を働かせて身体を通して学ぶことが重要であることを強調することが必要。
- 年長児では1クラスに1台は必要と考える。ただし、ICTを導入すること自体が目的とならないよう、幼児期における教育効果を考えて導入すべき。
- 幼児教育におけるICTの活用は、教育内容やその原理にまで影響が及ぶのか、それとも単なる手段や方法にとどまるのかといった点について考えることが必要。
- 教員用として、事務用PCのみならず、タブレットも、教員1人に1台必要。保育の記録や幼児との情報共有などに使えて、教育効果が非常に高い。

（保育の質と評価）

- 評価を考えるに当たっては、保育者が、自分たちで自分たちの保育を良くしていくという基本的な考え方が重要。
- 評価する側・される側という関係性ではなく、互いに保育を見合い、よりよい保育をつくっていくことに楽しみを見出すという文化の醸成が望まれる。
- 客観的に点数化・可視化する評定ではなく、園や保育者に寄り添いながら、自立的・主体的な質の改善につなげていく評価を行うことが重要。
- 保育の専門性の育成には時間、経験、組織的な支えが必要であることから、評価が、個人のものではなく、園全体でより良くなっていくためのものとして位置付けられ

ることが重要。

- 保育の質は、外からの客観的な指標で測るものではなく、当該園が目指していることで評価することが大切。保育者が互いに保育を見合い、当該園の目指していることをどうやって実現していくかを一緒に考えることが重要。
- 相互に公開保育を行うことが広まってきている中で、それをピア評価と位置付けて、実質的で支援的な評価を行い、学び合いながら高め合っていくのは非常に効果的である。なお、これを進めていく上では、評価観についての共有も重要。
- 保育を見る目というような保育評価の専門性を持つことが、これからもっと重要なものとして認識されていくべき。
- 園内研修や公開保育においては、“よかったね”で終わらず、さらに一步踏み込んで、より良くしていくために意見が出し合えることが重要。そうした評価者としての資質能力の育成や、評価者としての役割をキャリアパスに位置付けるといった仕組みが必要。
- 評価は保育をよりよくするものであるが、評価者の在り方によって評価に対する保育者の捉えが大きく変わってしまう。評価者の育成や評価をすると保育がよくなると思えるような仕掛けが重要。
- 研修体制が構築できる規模の地域ブロックで都道府県内を構造化し、都道府県・市町村の幼児教育センターが起点となって、評価の研修を充実することが必要。
- 保育の専門家ではない、地域にいる多様な人たちの協力を得て、一緒に保育の質の向上を図っていくこと、園が地域に開いていくことが重要。
- 人口減少地域では、少人数ゆえの遊びの展開の難しさや人間関係の狭さが課題である。保育者の配置も少なく、研修機会の確保も困難であることから、そういった意味での体制整備が必要。
- 幼児教育はどういったものか、何を目指しているのかということ、保護者も含め、社会一般に広げていくことが必要。

(幼保小の連携・接続)

- 江東区のように、リーフレットを作成したり連携教育の日を設定したりするなど、幼保小の連携・接続の重要性を自治体として表明していることや、全学区で連携教育担当者を位置付け、担当者会や研修等で継続的に交流し、互いによりよい連携・接続に向けて学び合っていく体制を構築していることは大変重要。
- 幼児教育の保育者が小学校の学びをみることによって、幼児期の学びを違う観点か

ら見つめることは非常に意義があり、多くのヒントが得られる。

○幼保小の連携・接続というのは、3つの資質・能力の育成という観点で取組を進めていくことが重要。